

2025.11.16.

「水の上を歩く」

旧約 出エジプト記 3章13～15節

新約 ヨハネによる福音書 6章16～21節

1. はじめに

イエス様は私共の思いを遙かに超えたあり方で、思ってもいない仕方で、私共の為に御業を為してくださいます。神様は全てをご存じであり、全てを行うことが出来る全能の御力を用いて、憐れみに満ちた御心の中で自由に御業を行われます。その御業は、私共の思いや想定を超えています。私共はそのような神様の御手の中に生かされているのですから、この御業を為される神様を信頼し、この地上を歩いていきます。それは実に平安に満ちています。私共はこの平安な歩みへと導かれています。

先週与えられました「五千人の給食の出来事」、そして今朝与えられております「イエス様が水の上を歩いた」という出来事は、まさにイエス様が私共の思いを超えた御業を為されるお方である、神の御子である、神様であるということを示しています。この二つの奇跡は、ヨハネによる福音書において記されている7つの「しるし」の4番目と5番目の「しるし」、イエス様が神の御子であることの「しるし」です。今朝与えられております「イエス様が水の上を歩いた」という出来事は、文字通り弟子たちが自分の命が助けられたという出来事でした。自分の命を助けてもらう。これほど私共にとって印象深い、忘れることが出来ない出来事はないでしょう。弟子たちは、「自分たちはイエス様によって命を救っていただいた」という思いをもって、この出来事をいつまでも思い起こしていたのではないかと思います。つまり、イエス様というお方は、弟子たちにとって文字通りの「命の恩人」だった。そのこと抜きに、イエス様は神の御子である、神様である、と宣べ伝えていったものではありません。イエス様が神の御子であり、神様まであるということは、理屈ではありません。実際に、この時弟子たちの命が救われたんです。そして、その方が十字架にお架かりになり、三日目に復活された。嵐の湖の舟で助かったのは肉体の命でしたけれど、十字架と復活において救われたのは、霊の命・永遠の命でした。弟子たちは、復活されたイエス様に出会って、あの夜ガリラヤ湖で救われた命は、肉体の命だけではなかった。復活の命へと導かれていく命であり、神様であるイエス様の御手の中で守られている命であったということを知らされたに違いありません。私共も今朝の御言葉から、イエス様が誰であるか、イエス様は私共に何をしてくださっているのか、そのことを新しく心に刻んで、父・子・聖霊なる神様を共に誉め讃えたいと思います。

2. ガリラヤ湖にて

五千人の給食の出来事はガリラヤ湖の東側で行われたと考えられます。この出来事後、イエス

様は「ひとりでまた山に退かれ」(6:16) てしまいました。マタイによる福音書では、イエス様は「祈るためにひとり山に登られた」(14:23) と告げております。そうだったかもしれません。いずれにせよ、イエス様は戻ってこられません。夕方になってきました。弟子たちは舟に乗り、ガリラヤ湖を渡って、ガリラヤ湖の西側、いつも自分たちが活動していた町カファルナウムに戻ろうとしました。ここには寝床もありませんし、野宿の準備もしていなかったでしょう。12弟子の中には、ペトロとアンデレ、ヨハネとヤコブといった四人のガリラヤ湖の漁師がいましたから、舟に乗って戻るのに躊躇はなかったと思われます。しかし、その舟でカファルナウムに戻る途中、大変なことになります。もう、日は沈んで、暗くなっていました。そこに強い風が吹いてきたのです。ガリラヤ湖というのは、琵琶湖に似ていまして、水はヨルダン川からしか出て行きません。琵琶湖は淀川からしか出て行きません。そして、周りは山に囲まれています。このような湖では、突然に強い風が吹いてくることがあるようです。この時もそうだったのでしょう。強い風で漕いでも舟は進まず、波は荒れ、水も舟の中に入って来たでしょう。大きな船ではありません。池に浮かぶ手こぎのボートを3倍くらいしたものを考えれば良いかと思います。漁師であった四人の弟子たちは、これが危険な状況であることはすぐに分かったでしょう。他の弟子たちは、なおのこと恐ろしくなったのではないかと思います。明かりはありません。真っ暗闇の中で、吹きすさぶ風の音と、船に打ち付ける波の音が響き、荒れた波によって船は木の葉のように揺れます。舟はこの時、岸から25～30スタディオン、現在の単位に直しますと1スタディオンが185mですから、4.5～5.5kmとなります。ガリラヤ湖東岸のベトサイダあたりから出発し、西岸のカファルナウムに向かっていたと考えられますが、この距離は10kmくらいですから、ちょうど真ん中あたりに来て、強い風に見舞われたわけです。前に進むにも、戻るにも同じくらい。彼らは一生懸命舟を漕いだでしょうけれど、真っ暗ですからどこに向かっているのかさえも良く分からない、そんな状態になっていたかもしれません。

3. 水の上を歩いてくるイエス様

その彼らのもとに「イエス様が湖の上を歩いて舟に近づいて来られ」(19節) ました。弟子たちは、そのイエス様を見て「彼らは恐れた。」(19節) と聖書は告げています。どうして恐れたのか、ヨハネによる福音書は何も記していませんけれど、他の福音書を見ますと「幽霊だと思い、大声で叫んだ」(マルコ 6:49) とあります。「イエス様が助けに来てくれた」と言って安心したわけではありません。幽霊だと思って、恐れ、おびえ、大声で叫んだのです。風と波に悩まされている最中、疲れてもいたでしょう、不安でもあったでしょう。そういう中で、弟子たちは近付いてくるイエス様を幽霊だと思って恐れ、おびえたんです。

これは「弟子たちは、イエス様が水の上を歩いてくるなどということは、全く考えていなかった」ということを示しています。イエス様が自分たちを助けに来てくれるということも考えていないし、

まして湖の上を歩いてくるなんて、全く予想もしていませんでした。しかし、イエス様は来られました。しかも、水の上を歩くというあり方で、弟子たちの所に来られた。

これは大切なことを私共に教えています。第一に、自分たちが期待していないときでも、イエス様は私共のことを覚えてくださっており、助けてくださるということです。この時、弟子たちがイエス様に助けを求めると、イエス様はその祈りを聞き、助けに来てくださったというのではありません。弟子たちは、イエス様がこの状況に自分たちを助けに来てくださるなどと思っていませんでした。しかし、イエス様は来てくださいました。

第二に、イエス様は「水の上を歩く」という、全く考えられない、絶対に人間には出来ないようなあり方で、弟子たちのもとに来られました。イエス様・神様のなさり様は、私共の想像を超えています。水の上を歩くなんて、人間には出来ません。ですから、イエス様にこんなことが出来るなんて考えていませんでした。ですから「幽霊だ」と思って、おびえた。確かにイエス様は人間でした。しかし、同時にイエス様は神の御子であり、真の神であります。ですから、水の上を歩いて弟子たちのもとに来ることもお出来になりました。

4. イエス様の恵みは不信仰を超えて、そして予測を超えて

ここで、弟子たちの不信仰が露わにされました。それはイエス様に助けを求めず、イエス様に期待もしないという不信仰です。イエス様はそのような弟子たちの信仰を知っておられました。知った上で、水の上を歩いて助けに来てくださいました。この時、イエス様は山に行かれて、呼べど叫べど聞こえないところにおられたのですから、イエス様が助けてくださるなんてとても期待出来なかった。彼らは、イエス様が神の子であること、神様であることを、まだ良く分かっていなかったのですから仕方ありません。では私共はどうでしょうか？イエス様は今もこの目には見えません。では、イエス様に助けを求め、期待せず、何とか自分でやっていく。これがキリスト者の姿なのでしょうか。そうではありません。神様、イエス様は、私共が助けを求めること、信頼して期待することを求めておられます。愛の交わりとはそういうものだからです。神様は私共を愛しておられます。ということは、神様の助けを、支えを、守りを、導きを期待し、祈り、願い、求めれば良いのです。そのような交わりを神様も求めておられるからです。

ただ、神様の助け方、支え方、守り方、導き方、それは私共が期待したようなものではないでしょう。神様の御業というものは、私共の予測や予想とはいつも違っています。また、助けを与えてくださる時期もそうです。私共は、困難な状況の中で神様に助けを求めるとき、こうしてほしい、こうなるように、と願い、求めます。それが悪いとは言いません。しかし、神様には神様のお考えがあるので、そしてそれは私共の小さな頭の中で「これが一倍良い」と思っていることよりも、ずっと良い道を備えてくださるのですから、安心して祈っていけば良いのです。

私はいつも言っているのですが、私共の祈りが聞かれていないと思う場合は三つしかありません。

第一に、その祈り自体が神様の御心に反している場合。もう働かなくても良いように、10 億円のジャンボ宝くじが当たりますようにと祈っても、それは聞かれないでしょう。第二に、まだその時が来ていない場合です。神様には神様の時というものがあります。私共はこういう時に、出来れば「すぐに」と思います。しかし、全知全能の神様の御心の中での時、「神様の時」というものがありますから、すぐに祈ることを止めてはいけません。そして、第三に、神様がもっとずっと良いことを備えてくださっている場合です。私共には、目の前のことしか見えませんし、まして苦しい時には、そのことが全てのように思えてしまうものです。しかし、神様はその全知全能の知恵の中で、私共にとって一番良い道、それは私どもが御国にたどり着くために一番良い道ですが、神様はそれを備えてくださっています。私共には一番これが良いことだと思ったとしても、神様の知恵の中では、もっと良い道が備えられています。この三つしかありませんから、私共は安心して、イエス様・神様を信頼して、正直に、大胆に、祈り願ったら良いのです。私共の小さな頭の中で神様を限界付けてはなりません。それも不信仰です。

5. エゴー・エイミー

さて、ヨハネによる福音書は、この出来事をマタイやマルコに比べますと、とても簡潔に記しています。それは、ヨハネにははっきりした意図があったと私は考えています。それは、この時のイエス様の言葉を際立たせたかったからではないかと思います。マタイやマルコにおいてこの出来事が記されている所では、弟子たちの言葉やイエス様の言葉を色々記しています。しかし、ヨハネによる福音書においてはイエス様が語ったたった一つの言葉だけが記されています。それは 20 節の「**わたしだ。恐れることはない。**」です。他の福音書においてもこの言葉は記されています。しかし、弟子たちやイエス様が語られた他の言葉にまぎれて、この言葉が際立っていません。しかし、ヨハネによる福音書はこの言葉だけに注目させようとして、このイエス様の言葉だけを記しています。

「恐れることはない」とイエス様が告げられたのは分かります。弟子たちは、イエス様を幽霊だと思っておびえているし、又強い風の中で荒波にもまれて弟子たちは命の危険をも感じていたでしょうから、「恐れることはない」と言われた。それは分かります。弟子たちを安心させようとしたのでしょう。しかし、それだけではありません。ヨハネは重大な意味をこの言葉に託しています。

それが、「恐れることはない」の直前の言葉、「わたしだ。」です。これはヨハネによる福音書において、何度も出てきます。他の所では「わたしである」と訳されていますけれど、ギリシャ語では全く同じ「エゴー、エイミー」です。エゴーは「私」、エイミーは「〇〇です」という意味です。これは英語ならば「I am」となります。これだけでは文章になっていないと思われるでしょう。実際、この後にパンを付ければ、「私はパンである」となります。ここではなんとか「エゴー、エイミー」を日本語にしようとして「わたしだ」、「わたしである」と訳しています。しかし、直訳すれば「わたしはある」となるでしょう。この言葉は、先ほどお読みいたしました旧約の出エジプト

記3章、モーセが神様に召し出されて、イスラエルをエジプトから導き出す者として立てようとした場面で神様の言葉として出てくる重要な言葉なのです。出エジプト記3章13節から読みます。

「3:13 モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」 3:14 神はモーセに、『わたしはある。わたしはあるという者だ』と言われ、また、『イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。』ここで神様は、モーセに対して「わたしはある」という者だとしてご自身の名前を示されました。この言葉がどういう意味なのか、様々な理解がされますが、今は、そのことには触れません。大切なのは、この神様のご自分の名前としてモーセに示された言葉が「わたしはある」であったということです。この言葉はヘブライ語で元々記されておりますけれど、旧約聖書をギリシャ語に翻訳した七〇人訳というものが当時用いられておりました。パウロが旧約を引用する場合も、この七〇人訳からです。そして、この「わたしはある」の七〇人訳の言葉が「エゴー、エイミー」だったわけです。イエス様はここで出エジプトにおいて神様がモーセにご自分を言い表された言葉、ご自分の名として示された言葉を用いて、自分のことを告げたわけです。つまり、ここでイエス様は自分が神様であることを宣言されたということです。ということは、イエス様はこの時弟子たちに対して「私は神だ。神であるわたしが来た。だからもう恐れることはない。」そう告げられたということです。神様だからイエス様は水の上を歩くことが出来たということです。

先ほど、この言葉はヨハネによる福音書では何カ所も用いられていると申しました。一つ上げますと、18章6節です。「イエスが『わたしである』と言われたとき、彼らは後ずさりして、地に倒れた。」ここはイエス様が捕らえられる場面ですが、そこでイエス様が「エゴー、エイミー。わたしだ」と告げると、イエス様を捕らえにきた兵士や祭司長・ファリサイ派の人たちが後ずさりして、倒れたというのです。なんだこれは、思われる方もいるでしょう。それは、この「わたしである」という言葉が何を意味しているかが分からなければ、何がここで起きたのか分かりません。イエス様が「わたしは神だ」と宣言し、その権威の前に人々は恐れおののき、崩れ落ち、倒れたということなのです。

また、このことを考えますと、今日の御言葉において弟子たちに「恐れることはない」と告げられたのは、単に強い風に恐れていた弟子たちを安心させようとしたというだけではなくて、「私は神だけれども、あなたたちは恐れることはない。あなたたちは神様に愛され、守られ、支えられている。」そうイエス様は弟子たちに告げられたという事でもありましょう。

6. 弟子たちを乗せた舟

さて、この後、弟子たちはどうなったかと言いますと、「舟は目指す地に着いた。」と告げられて

います。他の福音書はイエス様が「**舟に乗り込むと、風は静まった。**」(マタイ 14:32、マルコ 6:51)とあるのですが、ヨハネはそのようなことは何も記さず、「**彼ら(弟子たち)はイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。**」と記しています。この舟というのは、イエス様の弟子たちが乗っているわけですから、キリストの教会を指し示していると理解して良いでしょう。あるいはキリスト者を指していると読んで良い。キリスト者もキリストの教会も、逆風の中を進まなければならない時がある。高い波に翻弄されるように、どうなってしまうのだろうかというときもある。キリスト者もキリストの教会も、そういう時代を経て、今があるわけです。そしてこの舟は必ず「目指す地」に着くことが出来ます。

しかも、ヨハネはここで「**イエスを舟に迎え入れようとした**」だけで、間もなく目指す地に着いたという。イエス様を迎え入れると風は止んで、そして目的地に着いたというのとは、かなり違います。迎え入れようとしたなら、もう既にイエス様の守りの中にあるということです。信仰を与えられて、洗礼を受けて、キリスト者としてキチンと歩んだならば目的地に着くのでありません。イエス様を我が神、我が主として「迎え入れようとした」ならば、既に目的地、神の国に着くように導かれているということです。これは、何も難しいことを言っているのではありません。「イエス様を迎え入れようとする」心は、聖霊なる神様によって与えられたものです。そして、それを信仰と言うのです。間違えてはなりません。私共の信仰は、その始まりから終わりまで、ただ聖霊なる神様によって与えられ、育まれ、守られ、支えられていくものです。その恵みの中で、私共は今朝もこうして礼拝に集うことが許されました。まことにありがたいことです。この恵みの中を、この一週間も、イエス様を信頼して、健やかに、御国に向かっての歩みを為してまいりましょう。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝も私共に御言葉を与えてくださり、イエス様が真の人であり、真の神様であることを示してくださいました。感謝します。私共は自分の考えられる、まことに小さな範囲であなた様の御心と御業とを考えてしまいます。そして、自分の思いや願いが叶えられなければ、あなた様の御力も愛も疑ってしまうような不信仰な者です。しかし、あなた様はそのような私共を御子と与えるほどまでに愛してください、私共の思いを超えて御業を為してください、私共の御国への歩みを支えてくださいます。そのあなた様を信頼して、祈りと感謝と賛美をもって、この一週も歩ませてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン